

B班 ホテル エベレスト ビュー・コース

「私のセンチメンタル ジャーニー」

渡辺千恵子

11月30日に羽田を発ったもののRA機のトラブルで関空にステイすること2日、12月2日にやっとカトマンズの土を踏むことができた。同日に半日遅れで到着した仲間とも合流でき、そのときやっとネパ・ルツア - の本当の始まりを感じた。ホテル ヒマラヤでは、宮原社長の計らいで全員一人部屋をあてがわれ、その日は辺りを散策したり、ホテル内のお店を覗いたり、初めて来た異国の匂いを夢中でかぎ回るようにして過ごした。

12月3日はカトマンズ市内見物、まず目玉寺スワヤンプナートへ。その後旧王宮、ダルバ - ル広場、クマリの館をニーナさんに案内してもらった。「古都」で昼食のカツ丼をいただいてから、私たち女性全員はスシュマさんの実家

を訪問することになった。この時乗ったタクシーの運転手の暴走ぶりはすごく、少しの間間も巧みに割り込んでスイスイと渋滞を抜け、なんと後続のタクシーより10分も早く着いてしまった。ニュー - ロ - ドあたりで、カレンダー - 、岩塩等の買い物をし、旧王宮前のスシュマさんのご実家に伺った。彼女の家は、かつてはこの一等地に大きな住居を構え、村山先生がマナスルにいらしたときは、この家を定宿になさったと聞いた。この日は久しぶりに里帰りされたスシュマさんに会うため、広くない居間に親類の方が大勢集まっておられ、一緒においしいネパールティーをいただいてから私たちはホテルに戻った。

12月4日。B班9名はホテル エベレスト ビューをめざし、5時モーニングコール、6時ホテルを出発。三田さんから伺った伊藤先生伝授の高山病予防法をしっかりと守り、記念写真も撮り、満を持してカトマンズ国内空港に向かった。しかし、空港に着いてから、待てど暮らせど出発の案内はなく、そのうちにホテルで見送ってもら



スシュマさんの実家にて 親戚の皆さんと

ったはずの A 班が、さらに村山先生の C 班まで到着して、逆に見送ることになってしまった。お昼頃、霧のためルクラ行きの欠航が決定的になり、またバスでホテルへ戻ることになった。

午後、B 班女性陣（丸山・田中・岡田・宮地・渡辺）はタクシーでパタンの旧王宮を見学。パタンのダルバール広場はカトマンズと違ってのんびりしていて、しつこく物売りが寄ってくることもなく、パタンミュージアムの居心地のよいティールームでお茶をいただき、ゆっくり半日を過ごした。深瀬さんたち男性陣は、お向かいの本屋をウォッチングし、あとは個室に集まって、なにやら明日にそなえて英気を養っておられたそう。

12 月 5 日。昨日同様 6 時にホテルを出発。今日に期待をかけながらも、早朝からやけにスモギーなカトマンズの空を眺める。いやな予感。空港で古山さんが用意してくださったランチボックスの朝食をいただきながら、ひたすら出発の案内を待った……わけではない。ただ椅子に座っていたら運動不足になりかねないと、ぐるぐる空港内を歩いたり、コラス、東京音頭、ヨガ、手遊び、フラ

ダンス……………、みんな知っている限りの芸を披露して、半ばやけっぱちで手足と口の運動をしていた。いつのまにか宮地さんは、若いネパールの女性から「レッサム・ピリリ」の歌を習い私たちに教えてくれた。この歌がネパールの有名なフォークソングであることは後で知った。もちろん男性 4 人はもの静かに待っておられて、内心おおいに呆れておられたのではないだろうか。

結局この日も欠航ということで、午後はニーナさんの案内でバクタプル見学をすることになった。飛行機は欠航したけれど、世界遺産にもなってい



る、この街と王宮を見学できたことは、怪我の功名と思えるほどすばらしい経験だったと思う。どこか異次元の世界に迷い込んだような迷路のような街。この街はまた男の人が働かないことでも有名で、本当に昼間からみなブラブラ集まってカードなどをし、私たちがカメラを向けても全く我れ聞せずという感じ、それにはかなりカルチャーショックを受けた。このあたりから私はだんだんネパ - ル流のビスタリズムにはまっていったような気がする。

12月6日。「今日はゆっくり出しましょう」と古山さんに言われて、ニ - ナさんと8時頃空港に向かった。何度も通った空港への道、そして空港ロビー。吉川先生が「売店の人と顔馴染みになっちゃったよ」とおっしゃる。だれと



カトマンズ国内空港
かつてはここが国際空港でもあったとは驚きです

もなく「今日は飛ぶような気がする」と言うのが聞こえたけれど、いやいや、期待なければ失望もなしと、私は努めて希望をもたないようにした。

しかし、その人の勘が当たって、10時半、とうとう9人乗りヘリに乗ることになった。ぴったり9人が乗り込んで、うれしくて思わず「死んでもいいわ」と言ったら、吉川先生がぼそっと

「もったいない」とおっしゃった。まずクルラまで、眼下のマッチ箱のような村、川、谷、そして雲の上にパノラマのように現れたヒマラヤの山々、みな言葉もなく窓に顔を付け、夢中



働かない男たち（バクタプールにて）

でシャッターを押した。ルクラで給油のために降り、男性4人はそのまま先行出発、私たちも続いてホテル エベレスト ビューに到着した。

幸い、あんなに脅かされた高所障害もさほどでもなく、田中さんが少し酸素吸入をしたくらいで、みな元気だった。吉川先生はお医者様らしく、冷静にみんなの脈を測っておられた。残念ながら霧のためにエベレストは拝めなかったけれど、アマ・ダブラムの頂上が雄大に見え隠れし、それを背景にテラスで記念写真を撮った。ネパールの埃



ルクラにて

のせいか、三田さんは喉をやられて声がかすれ、しかし、亡き盟友伊藤邦幸*さんの名前を呼んで、これで思いが果たせたとほっとされていた。3880 m



ホテルのテラスから見るアマ・ダブラムの雄姿

* 伊藤邦幸(1931~1993): 1955 東大・文・修士(~57)、1959 京大・哲学・博士(~63)、1960 第5次南極観測隊(~61)、1963 京大・医(~67)、1965 東大カラコルム遠征隊に参加、キニヤン・キッシュ峰登頂。1968 日本キリスト教海外医療協力会スタッフとしてネパールへ。オカルドゥンガでの診療活動をはじめ、以後ながくネパールでの診療活動に携わる。

でいただいたコ-ヒーもおいしかった。ホテルのシェルパが50mほど下って見せてくれたクムジュンの部落を見下ろして、今度はぜひあの村を訪れてみたいと思った。

1時間ほどホテルで寛いでからヘリでカトマンズまで戻り、昼食後3時半、18人乗りプロペラ機でポカラに向かった。乗ってからすぐにカットした綿菓子のようなものが配られて不思議に思ったが、それは騒音防止耳栓のカット綿だった！

ポカラの空港の貧弱さにはびっくり、トイレにもびっくり。シ-ズンには観光客がわんさと来るだろうに……。迎えてくれたマイクロバスで一路サランコットのロッジに向かう。途中からバウンドしそうなガタガタ道を行くと約1時間、夕方無事ロッジに到着。



村山先生と歌う(サランコットのロッジ)

村山先生はじめ先着のA班・C班の皆さんの盛大な出迎えを受けて、ついに全員集合となり、今日はこのツアーのハイライトだと感じた。その夜のパーティも楽しかった。村山先生と肩を組んで歌も歌った。すばらしい声量の遠藤八十一さんが後で、村山先生があんなに楽しそうに歌を歌われたのを見たのは初めて、とおっしゃっていた。

12月7日。朝6時半ころサランコッ



青空に浮ぶマチャプチャレ(ポカラにて)

トの展望台に行き、アンナプルナ山群の雄大な日の出を見た。マナスルも黄金色に輝いていた。何枚もカメラで撮ったけれど、生きもののように神々しいこの山々を、写真という紙に収めるのは到底無理だろうと思った。ロッジに戻ってからその屋上で、雄大なマチャプチャレを拝みながら最高に贅沢な朝食をいただいた。

この日の、サランコットの丘からペワ湖まで下るといふハイキングもとても楽しかった。おだやかな山村、美しい棚田、中腹にある学校、すれ違うネパールの女性、道みちに繁る菩提樹、なんとすがすがしい山下りだったことだろう。B班の最初の予定ではシャンボチェからホテル エベレスト ビューまで歩くことになっていて、私たちは出発前の何か月間、にわかトレッカーになって三ツ峠山や富士山に登って足馴らしをしてきた。それがヘリで直行ということになり、このサランコット

のハイキングがこの旅唯一の疑似トレッキング体験となった。それで日本に帰ってから、あまり事情をよく知らない友達には、トレッキングもしてきたわ、とおおいに吹聴している次第。

この日の夜は宿泊先の Fish Tail Lodge で安藤夫妻も交えてのパーティ。女性陣はニーナさんからにわか仕込みのレクチャーを受けて、あの「レッサム・ピリリ」を披露した。おしゃれな丸山さんは、お気の毒なことに、パーティが始まる前シャワー室で転倒され、念のため安静にということで、ご自慢のパーティドレスのお披露目はついにならなかった。

12月8日。ポカラからカトマンズまで、バス、大型バン、乗用車と3台に分かれてカトマンズ街道をドライブ。旅の疲れで最初からお休みモードの人もいたけれど、窓からの風景が珍しく、私たちは後部座席のサーダー、ダヌ氏を質問攻めにした。



サランコットのハイキングコース

旅行前に読んだ椎名誠のエッセイ「ネパールヨレ足旅日記」（『週刊文春』）のとおり、がけ崩れのままの道、荷物いっぱいの定期バス、途中のバザールでの昼食、誌上の旅をリアルに実感することができた。

12月9日。午前中は古田さんが見つけた「ホテルの車の市内行きサービス」を利用し新王宮まで行って、そのあたりの高級住宅地を散策した。午後は駐ネパ-ル日本大使（神長大使）公邸訪問ということで、りっぱな公邸でお茶と手作りのチョコレート-ク-キをいただいた。トピーを被られた村山先生が大使の隣で堂々のご挨拶され、あらためて先生の大きさを感じた。

すべての旅程を終え、この日予定どおり夜11時過ぎにRA機で帰途についた。

バルマさん、チャリセさんがご一緒されたパ-ティの席上で、村山先生は、この旅は自分のセンチメンタル ジャ-ニーだとおっしゃった。マナスル登山が南極観測につながり、それからもう50年ということで、深い感慨をこめてお話をされた。

もう30年も前、私は名古屋大学の樋口研究室に勤めていて、そこでは雪や氷、氷河の研究がされ、入れ替わりたち替わり研究者や学生がネパールに調査に行っていた。私はそこで地図のトレ-スや論文のタイプもしていたので、門前の小僧で、ポカラ、ナムチェバザ-ル、クンプやランタン……、地名だけはやたらによく知っていた。それが今回の旅で、記憶のなかのイメ

ージの地名とリアルな地名がようやく重なって、レンズのピントがピッタリ合ったときのように、爽快な気分を味わうことができた。

そして、ホテル エベレスト ビューに向かうヘリからクンプの山々を眺めたときは、夫が2人の息子に西藏、雪蔵と命名した気持ちを初めて理解できたと思った。

そういうわけで、村山先生の壮大なセンチメンタル ジャ-ニーには遠く足元にも及ばないけれど、今回の旅は私にとってもささやかなセンチメンタル ジャ-ニーだったと思う。葦の髄から天井を覗く、というのは矮小なことを言うのだろうか。でも今回、私は葦の髄から急に広がった世界に躍りてた気がして、帰国以来いまだに躁状態から抜け出せないでいる。部屋には目玉寺の五色の旗、あちこちに飾られた山の写真、お風呂ではネパ-ル岩塩……、私のネパ-ル熱は当分収まりそうにない。

村山先生はじめこのすばらしい旅を共にして下さったすてきな南極男たちと愉快的友人たちに、親身でお世話くださったヒマラヤ観光の皆様、物心ともにフォローして下さった山田さんに、そして快く送りだしてくれた夫に、心から感謝をこめて申し上げます、ダンニャバード！



B 班

